

漢語放言史の不連続性：中国語言語地理学序説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩田, 礼 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008921

漢語方言史の不連続性*

—— 中国語言語地理学序説 ——

岩 田 礼

1. グロータース論文集の意義

『中国の方言地理学のために』（好文出版，1994 年 9 月、以下『論文集』と呼ぶ）は、W. A. グロータース神父の中国時代（1939-1948）の主な著作を選んで翻訳、編集したものである（岩田礼・橋爪正子共訳）。この仕事は私にとって十年来の懸案であったので、今それがやっと実現して感慨無量である。ちょうど時を同じくして、グロータース神父の輔仁大学での教え子であった王輔世教授（中国社会科学院民族研究所）が来日され、神父の指導になる修士論文『宣化方言地図』（1950 年 5 月提出）が出版されたのも（東京外国語大学アジア・アフリカ研究所，1994 年 9 月）、タイムリーで、喜ばしい。なによりもグロータース神父と王輔世教授がこれまで健康を保たれ、私との出会いと学習の機会を作って下さったことに感謝している。小論は両先達の著書の出版を記念して執筆する。

今世紀における中国語の歴史的（通時的）研究の流れを決定づけることになったのは、前時代（清朝）の考証学者たちが行った文献研究と今世紀初めにカールグレン（B. Karlgren）がその基礎を築いた比較言語学的研究である[！] 比較言語学は言語史を明らかにするための最も有効な方法の一つであるが、本来これを補うべき方法として言語地理学がある。“補う”といったが、思想的には両者は対極にある。前者が“音韻法則（Sound law）”なる表現に集約されたような言語史の規則性、連続性を主張するのに対して、後者は不規則性、不連続性を主

* 小論は“第 4 回漢語史研究会”（1994 年 5 月 30 日，青山学院大学青山校舎）における発表原稿に加筆したものである。会の主宰者である遠藤光暁氏をはじめ多くの方にご意見をいただいたことに謝意を表したい。また同僚の山口幸洋、川口裕司両氏からは日本語やフランス語の諸現象について多くのご教示をいただいた。小論はこれのお二人と進めた平成 5 年度科研費一般研究 C（萌芽的研究）「対照言語地理学の試み」（課題番号 05801069）の成果の一部である。

張するからである(「各語はそれぞれ固有の歴史を有する(Each word has its own history)」)。いうまでもなく後者は前者に対する批判と反省の中から生まれた。19世紀末の西欧で誕生した言語地理学は日本と中国にほぼ同時期に伝えられ、紹介された(『日本の方言地理学のために』平凡社、1976、p. 235-6、『論文集』p. 25、p. 43 訳注 5)。上記グロータース・王輔世の研究は中国でそれを実践した先駆的な試みであった。しかし言語史の不規則性、不連続性と各方言の独自性を主張するこの学問は、様々な理由に因ってこの国に根付くことがなかった：国土の広さ、前時代からの学問的伝統の重み、そして政治的状况。マルクス主義と同様、生物学的モデルに着想した比較言語学が容易に受け入れられたのとは好対照であろう。言語地理学は皮肉にも、戦後グロータース神父と共に中国を離れて日本に渡り(1950)、すでに柳田国男『蝸牛考』(1927)を嚆矢として研究の素地を形成していた日本の研究に決定的な影響を及ぼし、『日本言語地図』(1966-1974)として結実することになった。無論、戦後中国の方言研究も独自の発展を遂げている。しかしその代表的成果の一つである『中國語言地圖集』(1987, Hongkong, Longman)は“方言区画地図”であって、『日本言語地図』との問題意識、手法の違いは誰の目にも明らかである。言語地理学が言語史を明らかにするための普遍的方法であることは、欧米や日本の経験に基づいて明らかであるにもかかわらず、中国ではその意義が現在でもほとんど認識されていない。一方北米では、中国語方言の研究から生まれた W. Wang (王士元) 氏らの“Lexical diffusion (語彙拡散理論)”が、音声変化を(さらに近年では文法変化なども)説明する“普遍的理論”として影響力をもつに至っている。しかしながら、それが真に“普遍的有効性”を有するか否かは、“より普遍的方法”である言語地理学による検証を俟たねばならないだろう。

極東に辿りついた言語地理学を、中国語の領域で再生させるための基礎作業を行う場として組織したのが、科研費総合研究(A)「漢語諸方言の総合的研究」(1989-1992)であり(報告書3冊、1992年発行)、その理論的根拠を示すために行ったのが、『論文集』の訳業であった。「訳者あとがき」で述べたように、『中国の方言地理学のために』なる書名から大方が想像されるのとは異なって、私自身は本書によって中国の研究に対する直接的な影響を意図した訳ではない。それは“してはいけないこと”である。私達ができることは、今進めている研究によって真理を明らかにすることである。しかし訳業を終えて痛感するのは、私自身が地理学的方法についての勉強が足りず、これまで発表した論文でも諸現象の理論的位置づけが不十分であったことである。また日本の中国語学会で

も、方言地理学といったら、周圏分布、A B A分布くらいしか想起されないのではないか、との思いがある。

柳田国男の『蝸牛考』では周圏論が作者の方言に対する“思想”になっている。しかしそれが一旦作者の手を離れると、それは方言地図を解釈する“一つの方法”にすぎなくなる。少なくとも私にとってはそうである。“Wellentheorie”は現在でも様々な形で生きているのだが(例えば M. Hashimoto “Hakka in Wellentheorie perspective” *Journal of Chinese Linguistics*, 20-1, 1992)、言語地理学の“思想”とその成果は、周圏分布・A B A分布にとどまるものではない。実際グロータース神父やジリエロン(J. Gilliéron)の作品を読んでも²⁾ 周圏分布・A B A分布が明確な形で定式化されている訳ではないことがわかる³⁾。そこで手始めとして、小論ではグロータース神父の主張に従って、私が江蘇省東北部地域などで得た知見を整理してみたいと思う。日本語方言の研究者などにとっては「なにをいまさら」と思われることばかりだろうが、中国語研究ではこのような基礎研究が従来皆無であった。

最初に『論文集』から、中国に於ける言語地理学の“思想的意義”について述べた一節を二箇所引用する。

- ①中国各地の方言は古代以来それぞれ独自の発展を遂げてきた(p. 123 要約)。
- ②現在の中国文献言語学の誤りは、文献を拠る所にする点ではなく、書き言葉の漢字に対する語を方言に見つけようとする点にあり、それは中国語の変化の連続性を前提としているからである。しかし事実なことごとくその連続性を否定している。確たる歴史的研究を築きあげる方法は唯ひとつ、現代方言に裏付けられた言語の地質的研究による以外ないのである(p. 124)。

以下上記二点について検討するが、重点は②にある。

2. 漢語方言の複層性

まず上記①の主張について簡単に説明しておく。この主張は「中国各地の方言は祖語から直接的に派生した」とするカールグレンを始めとする歴史音韻学者の主張と衝突する。グロータース神父は大同方言で「昨日」を表す語形、[jər kə][jɛ ni kə]を取り上げ、カールグレンが報告する「昨」[tsua]は「(大同の農民にとって)アルプス登山のガイドがイギリス人旅行者の口にする“Thank

you”を理解するようなもの」という(『論文集』p.123)。事実、北方方言において「昨」を用いる地点は北京、沈陽など大都市に限られるようであり、圧倒的多数が「夜」([jɛ])の語源だが、話者はすでに語源を意識しない)を含む語形である(『漢語諸方言の総合研究』第二分冊、地図5)。最近得られた天津市のデータでも「昨」を用いる地点はごく少数で、多くは「夜」又はその変異形である(『天津簡志』天津人民出版社、1991, pp.1302-3)。尤も少数みられる「昨」が河北省の未調査(報告)地点に分布する可能性は充分あるが(河北省は語彙資料が少ない)、そうだとするとそれは河北省方言の北方方言に於ける特殊性を浮き彫りするだけのことで、これはまた別の問題(即ち北京標準語形成の問題)に発展する。

もう一つ例を挙げよう。「祖父」(父の父)を表す語形の語幹は全国で「爺」「公」「爹」のいずれかで、「祖父」或いは『爾雅』にみられる「王父」など、「父」(又はそれから派生したと考えられる「爸」)を語幹とし修飾成分を伴う語形はほとんどみられない(『漢語諸方言の総合研究』第二分冊、地図6)。まれに報告されても、資料の信憑性、或いはいかなる場合に用いられる語形か疑わしい。

わざと問題をずらしている、との批判を受けよう。カールグレンが研究したのは「昨」の字音であって、「昨日」の語彙形式ではない、と。まさにこの点が問題なのだ。カールグレンは言う、「方言という用語が何を指しているかここに定義しよう。私の念頭にあるのは“de patois”(俚言)、つまり中国農村の“土話”や社会最下層の方言ではなくて、古代ギリシャ語方言のような方言、もっと身近な例を挙げれば教養ある上海紳士や北京市民の言語に代表される方言である」(“The Authenticity of Ancient Chinese Texts”, BMFEA, 1, 1929, p. 180, 訳文は『論文集』P.84 脚注②)。このような言語(方言)を対象にすれば、カールグレンが「中国方言が601年の『切韻』の言語と直接の派生関係にある断定できた」(『論文集』p.20)のも当然である。事実「夜」にせよ「爺」にせよ、字音を調べれば、多くの方言で中古音と対応関係が見いだされるであろう(「爺」は各地で不規則形が現れることが多いが、これは親族称谓の体系性、小児語等の影響によって生じた「音韻対応の例外」として処理されよう)。では「昨日」や「祖父」を表わす「夜」や「爺」は一体どこから来たのか?なぜ現在北方中国のほぼ全域をカバーするような勢力を得るに至ったのか?これらの問題はごく少数の紳士や知識人が使う言語とは全く別の位相で研究されねばならない。

一言カールグレンのために弁護しておけば、彼は古代中国語に単一の方言を想定し、現代諸方言との一対一対応を考えていたのではない。むしろ前掲論文

などでしきりに強調しているのは、古代中国に複数の方言が存在したことであり、それがマスpero (H. Maspero) などとの大きな対立点になっている。たとえば“ふね”は、『莊子』で「船」がみられるのに対して、十三経の他の経文ではすべて「舟」であり、これは揚雄『方言』巻九の記述（舟、自關而西謂之船、自關而東或謂之舟或謂之航）とよく一致する、と（カールグレン前掲論文 p. 181）。問題は「農村の“土話”や社会最下層の方言」を排除し、古代方言が独自の発展を遂げた可能性を除外してしまったことである。

3. 方言の不連続的發展

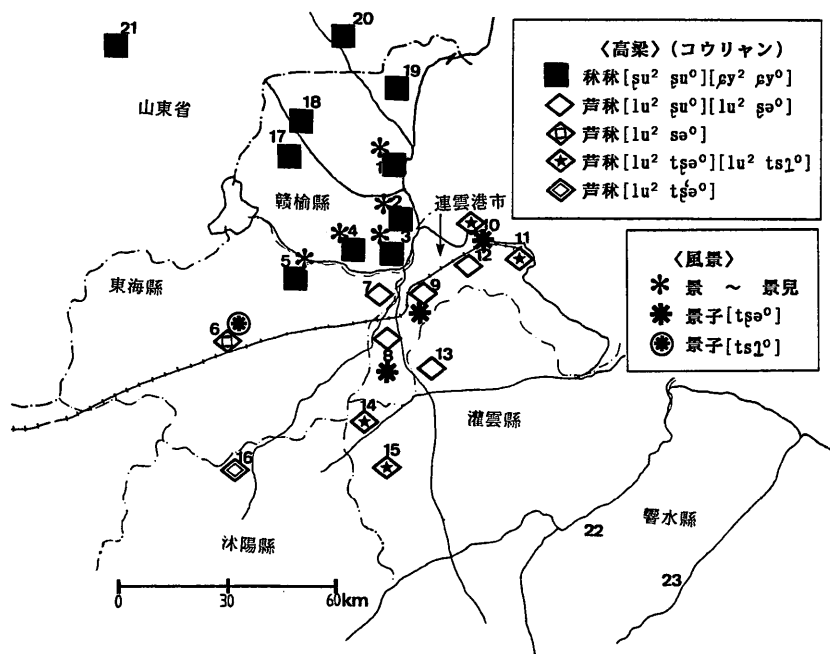
中国語の歴史的研究は清朝考証学からカールグレン、そして近年の“Lexical diffusion”説に至るまで、「変化の連続性を前提としている」点では一致しているように思われる。但し一部の考証学者は「事実なことごとくその連続性を否定している」ことに気付く可能性(条件)があった、と私は想像している。

今から二百年前の考証学者、程瑶田は“奴子”に対する“方言調査”の結果、『詩経』小雅・小宛「螟蛉有子、蜾蠃負之」で桑虫(蚕の幼虫又は蛹)の義とされる“螟蛉”が、(北京の)方言では小蜘蛛を指すことを発見した。『詩経』でいう“蜾蠃”とは寄生蜂のことで、“螟蛉”つまり桑虫の体内に卵を産みつけて孵化させるのだが、鄭玄注が「螟蛉(桑虫)に子ができたら、蜾蠃(寄生蜂)がそれを引き取って養い、成長させる」と解釈するように、古来“蜾蠃”は養子をとる徳の高い虫という迷信が広がっていた。程瑶田が見たものは、蚕の蛹にくっついて小蜘蛛であり(蜘蛛が蚕の蛹に卵を産みつけて孵化させる)、“奴子”はそれを“螟蛉”と呼んだのである。つまり“螟蛉”が桑虫にも蜘蛛にもなり、また“蜾蠃”は蜂にも桑虫にもなる。程瑶田は言う：「夫螟蛉、蜾蠃、蒲盧，皆字之雙聲疊韻者也。擬諸形容，大率無專物。如果蠃之實栝樓，則謂瓜爲果蠃；元雉入淮爲蜃，則謂蜃爲蒲盧；鳥亦有果蠃之名；禾穗亦謂之果蠃；夫螟蛉也而豈有專名乎？」[そもそも螟蛉、蜾蠃、蒲盧などはみな双声疊韻語であるが、これらの語形を用いる場合、対象物との関係は一対一対応をしないことが多い。例えば『爾雅』で「蠃之實、栝樓」というのは、瓜のことを指しているのだし、他の古典文献では蛤、鳥、穀物の穂などを指すこともある。(逆に)螟蛉なる物に対して単一の語形が対応することもないのである。]（『釋蟲小記』「螟蛉蜾蠃異聞記」，引用は洪誠『中國歷代語言文字學文選』江蘇人民出版社，1982，pp. 33-36 による）。

日本語方言でも、例えば“とかげ”／“かまきり”／“ばった”／“きりぎりす”（「かまぎつちょ」）、“とうもろこし”／“とうがらし”（「なんばん」）などが同じ（又は似た）語形で呼ばれることがある。またグロータース神父は（中国の）大同・宣化方言で“こうもり”と“あり”、“とかげ”と“いなご（正確にはヤブキリ）”が類似した語形を有することを報告している。言語地理学者はこのような現象を“同音衝突”或いは“類音牽引”と呼び、地理的分布に基づいて語形・語義変化のメカニズムを説明している。程瑶田の功績は、実証的な研究に基づいて“名”（signifiant）と“実”（signifié）の関係が変化しやすいことに気付いたことである。しかし、考証学者としては当然のことながら、残念なことに結論は一足飛びに古典語の方に向いてしまった。その著作『果羸轉語記』で展開された“一聲之轉”説がそれである。彼は、「果羸」類の語、即ち、穀物の穂より始まって、ハチ、なべ、うり、ケラ、さらには高句驪といった地名（国名）まで、200以上の複音節語を列挙し、それらの音義が転じていく様を説明した。つまり、これらの語は双声疊韻という共通する音声要素と“まるっこいもの”⁴⁾という抽象的語義を有するが故に同源語だ、とするのである。今“一聲之轉”を批判するのは容易である。曰く、音韻法則に合わない、音義転変の説明が恣意的である、と。しかし上述のように、気まぐれな変化は現在も至るところで起きている。“一聲之轉”が起きる言語学的メカニズムを直接古語ではなく、まず生きた方言について考察する必要があった。程瑶田はまぎれもなく科学的精神旺盛な言語学者であった。問題は今世紀の中国語学者がその枠を越えなかったこと、即ち、方言研究が古代語研究に従属してきたために、言語変化の真実が覆い隠され、「他の諸言語の方言調査で得られたような革命的な発見」（『論文集』p. 150）が遅れてしまったことである。

さてここで“変化の不連続性”とはなにか明確にしておきたい。

地図1は江蘇省東北部で“コーリャン”を表す語形の分布を示したものである⁵⁾。北部に「林林」、南部に「芦林」が分布し、等語線が集中するこの地域の特徴を端的に示している。南部の語形は第二音節に様々なバリエーションがあるが、それをすべて「芦林」としたのは、私の通時的解釈、つまり語源を漢字で書いたものである。本稿ではこのように方言語形を漢字表記をすることがある。漢字表記の弊害はグロータース神父の強く批判される所であり、漢字だけの表記は本来避けるべきである。しかし漢字は言語記号の signifiant を示すには不十分であっても、ある程度 signifié を示し得る、という特性をもっている。この特性を利用して当該語形についての（通時的、共時的）解釈を示すのは、音声的



地図 1

バリエーションが際限なく多い漢語方言について、特に広域地図を解釈し、説明するときは便宜的な手段として有用だと考える。問題は従来の研究がこの段階で終わってしまっていたことである。ここでは「芦秫」の第二音節がなぜ様々なバリエーションを有するに至ったかを明らかにせねばならない。以下音声表記をする場合は、歴史音韻学という陰平、陽平、上声、去声、入声をそれぞれ 1, 2, 3, 4, 5 の数字で表す。

まず「芦秫」* [lu² ɕu²] の語義は“芦のような形状のモロコシ”。第一音節の語源は或いは「炉」かもしれない。その場合は“燃料用のモロコシ”。いずれにせよ修飾構造をなす語形である。同様の語形に「棒秫」(トウモロコシ)があり、これは“棒状の実を付けるモロコシ”である。このような語彙の paradigm が形成されている場合、修飾成分に強アクセントが置かれ、被修飾成分は軽声化(弱アクセント化)することが多い。これは語形の第二成分がすでに恣意性の高い記号に変質したことの音声的な反映である。連雲港市の市街地(地点 8, 9)及びそ

の周辺に分布する[lu² s̥u⁰]は「芦林」の規則形だが、第二音節は軽声になっており、母音まで弱化して[ə]となることもある。そこで新たな変化が生起した。地点 10, 11, 14, 15 の語形[lu² t̥s̥ə⁰], [lu² ts̥ɿ⁰]は、話者の意識では「芦子」であって、「林」に対する語源意識は全く失われてしまっている。つまり「芦林」の第二音節が名詞接尾辞「子」に変化したのである（以上、拙稿「中国語方言の理学的研究」しにか 1992-4 参照）。ここで「芦林」が「芦子」になったのは、第二音節が[s̥u⁰], [s̥ə⁰] > [t̥s̥ə⁰]という“音声変化”を起こしたのではない。話者の言語意識が[s̥u⁰], [s̥ə⁰]という arbitrary な記号を接尾辞に置き換え、接尾辞を有する一群の名詞の中に系列化したのである。「芦林」[lu² s̥u²] > 「芦子」[lu² t̥s̥ə⁰]のような変化は、“音韻法則”によっては説明不能であり、このような“断絶”を“変化の不連続性”と呼ぶのである。

名詞第二成分の接尾辞化は、“コーリャン”に限らず多くの名詞で生起しているようである。「棒林」（トウモロコシ）、「老鼠」（ネズミ）、「疙渣」（おこげ）などの第二音節にも同様に[s̥ə⁰], [t̥s̥ə⁰], [t̥s̥'ə⁰]などが現れるからである（拙稿「江蘇省・連雲港市、東海県での方言調査（補）」均社論叢 13, 1983 参照）。名詞の調査項目は地点 1-10 が 120、他地点が 60 にすぎないから、接尾辞化はこの地域の方で組織的に生起していると考えて差し支えないだろう。

接尾辞化の結果が「子」接尾辞と一致するとは限らない。地点 6, 16 の[sə⁰], [t̥s̥'ə⁰]がその例である。この二地点には平行例が少ないが、地点 16 には「老鼠」[lao³ t̥s̥'ə⁰]がある。一方地点 2, 3, 5 では接尾辞形式の均一化が進んでおり、“トウモロコシ”、“ネズミ”、“おこげ”の三語について、地点 2, 3 では声母が摩擦音([s̥ə] [s̥ɿ] [s̥aŋ])、地点 5 では無声有気破擦音([t̥s̥'ə] [t̥s̥'ɿ])となっている。地点 2, 3, 5, 6, 16 では「子」接尾辞がいずれも[ts̥ɿ⁰]である（地点 16 では一部[t̥s̥ə⁰]）。では「子」以外の接尾辞形式の均一化が徹底しないのはなぜか。それは第一に、「各語はそれぞれ固有の歴史を有する」からであり、第二に各地方言は隣接する方言の影響を不断に受けているからである。

この場合歴史音韻学者(Neogrammarian)なら別の解釈を考えつくかもしれない。「林」の声母は中古中国語の船母(*dʒ)に由来するが、この地域より北では摩擦音の[s̥]に変化したのに対して、南では破擦音の[ts̥']に変化したため、一部の地点では破擦音で現れるのだと。「林」の字音を調査したわけではないが、同様な例として「鼠」（中古声母 *ɟ）と「徐」（中古声母 *ʒ）があり、北では摩擦音([s̥], [ɟ])、南では破擦音([ts̥'], [t̥ɟ'])で現れる。上記の変化が方言境界地域に於けるこのような音声的差異を背景とすると考えても、一向に構わな

い。しかしながら事の本質は、「秣」や「鼠」などの“字”(即ち形態素)が“語”の中でそれと意識されなくなったことにある。そうでなければ、なぜ第二成分が同じ破擦音でも、(無声有気音ではなくて)無声無気音になる地点があるのか説明ができないだろう。

歴史音韻学者は、ここでのいう“変化の不連続性”を“音韻法則の例外”と呼んでいる。平山久雄「中国語における音韻変化規則の例外—それを生み出す諸原因について—」(東方学 85, 1993)は、文字どおり音韻法則の例外的諸現象を類型化し、その原因を考察した論考だが、その中で“通俗語源”(Folk-Etymology)による語形変化の例として、“太陽”を表す広州、梅県などの方言語形「熱頭」を取り上げ、次のように述べている：「これは声訓風にいえば「日、熱也」という語源意識が働いて「日」* niet が「熱」* niet に置き換えられた結果であると考えられる」(下線は岩田)。広州方言を例にとれば、[jat] > [jit] という音声変化が生じたのではなく、まさしく「日」が「熱」に“置き換えられた”のであって、下線部は全く正しい。「日」と「熱」の間には“音韻法則”では説明できない“断絶”があるのであり、やはり“変化の不連続性”の一例とみなすことができる。

言葉の言い換えにすぎない(「例外」→「非連続性」)と思われる読者のために、二点コメントしておきたい。第一に“例外”は至るところで日常的に生み出されているが故に、“音韻変化の例外”ではあっても“言語変化の例外”とはみなし得ない。“例外”ではなく、“変化”そのものなのである。また“断絶”は音韻法則の介在しないところにも生起しているから、“不連続性”は純粹に語彙的、統辞的な諸現象も含めてあらゆる種類の言語変化について指摘しうる。第二に、語源意識が働くのは一般に新語形形成の当初だけであって、その後語形は再び恣意的な記号にすぎなくなる。この場合“日、熱也”という語源意識は比較的保たれ易いかもしれない。しかし上記“コーリャン”の例で指摘したように、多くの場合語源は忘れ去られてしまうものである。新語形は一旦形成されると、もし言語外的要因の支えがあれば、周辺地域に伝播していくが、その際語源が何であったかは全く無関係である。従って「熱頭」が現在広東省や福建省などかなり広い地域に分布するのは、語形の伝播に伴う“借用”であるといわねばならない。

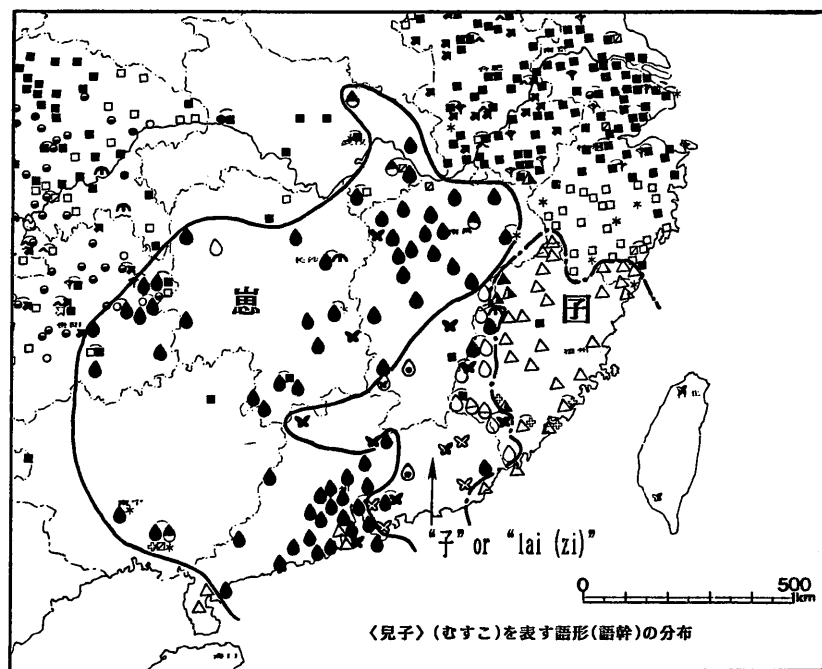
以上の例における Neogrammarian と言語地理学者の違いは、同じコップをどちらから眺めるかの如き、或いはコップに入った亀裂をどの程度に評価するかの如き違いであって、歴史言語学に於いて両者は補い合う役目をするもので

ある。ところが中国語研究では文献に絶対的優位性が与えられ、民衆の生きた方言は文献に対応する語が見つかった場合のみに“輝く”のが現状であって、そのためしばしば誤った解釈がもたらされる。

拙稿「連雲港市方言的連讀變調」(方言 1982-4)は、『方言』編集部が周到な校正をして下さったお蔭で、誤植が三箇所しかない。拙文としては珍しいことで感謝している。三箇所のうち一箇所は私の誤り、あと二箇所は私が関知しない。いずれも“本字”に関連する誤りで、それぞれが興味深い問題を提起している。ここで取り上げるのは、その中の“景色”を表す語形[tɕiŋ³ tɕə⁰]である。第一音節が「景」であることは疑いない。第二音節は私の原稿では「子」。話者にとって[tɕə⁰]は名詞接尾辞以外のなものでもないからである。ところが刷り上がった拙文をみると「致」になっている(p. 290)。これは語源を重視した表記と考えられる。「景致」という語形は全国的に分布しているようであり(『漢語方言詞彙』p. 11)、またなによりも唐詩などにもみられる“由緒正しい”語形である(“規模何日創、景致一時新”白居易詩)。さらに先の“コーリャン”と同じことで、最終音節の音声的弱化に伴って、「致」[tɕɿ⁴]の語源意識が失われ、「子」[tɕə⁰]になったとみれば、本稿の立場からも[tɕə⁰]の語源が「致」であることに疑いがないかにみえる。ところが連雲港市に接する贛榆県・東海県では調査した6地点のうち5地点までが[tɕiŋ³]又は[tɕiər³](即ち単音節の「景」又は「景兒」)であり、残りの1地点(地点6)では[tɕiŋ³ tsɿ⁰]「景子」であった(地図1参照)。このことからもう一つ有力な解釈が出てくる。即ち連雲港の[tɕiŋ³ tɕə⁰]は「景致」とは無関係で、単音節の「景」に由来すると。とすれば従来「景致」と報告されていた方言形も、少なくとも第二音節が接尾辞「子」と同じ形式をとるものは(沈陽、揚州など)、その起源について再検討を行う必要がある。

この例からわかるのは、語形の地理的分布に目を向けることがいかに重要か、また文献と方言の個別的対応に頼って「書き言葉の漢字に対する語を方言に見つけようとする」ことがいかに危険か、ということである。

今なお盛んな“本字考”の如きは、変化の連続性を前提としなければ全く成り立たない。ところが現実の方言では連続的変化を阻害しようとする要因が常に作用しているのであって、ある地点のある方言語形がある時代のある文献にみられる語との間で音声的、意味的な対応関係にあることが証明されたとしても、その語がその時代以降その地域に絶えることなく連綿と伝わってきたことを証明したことにはならない。その語形は他地域から伝播したものかもしれない



地図 2

いし、或いは他地域と一致する語形が偶然生まれたのかもしれない。そうした危険を回避する方法は唯一語形の地理的分布という“面”の裏付けを得ることである。

地図 2 は“むすこ”を表す語形の分布を示した広域地図(華南)である(静岡大学学生、福村恭子作成)。この地図で「崽」という語形は、北は湖北省から南は広東省に至る広い範囲に分布している。これは揚雄『方言』(巻 10)の記載「崽者子也。湘沅之會、凡言是子者謂之崽、若東齊言子矣(郭璞注：聲如宰)」と見事に一致するので、福建省に分布する「囝」(唐・顧況「囝」詩及び「集韻」に記載)と並んで、多くの方言学者が取り上げる例となっている。湖南省で「崽」が二千年間連綿と伝わってきたことは、この地図によってはじめて 90% 証明できたといえよう(あと 10% は揚雄『方言』と現代方言をつなぐ文献資料が必要だろう)。文献研究が無用だといっているのではなく、地理的分布という“面”の裏付けがあってはじめて文献言語学が真の通時的意義を有するのである。

同様の例として揚雄『方言』(巻11)の挙げる「蚺蜉、齊魯之間謂之蚺蜉(郭璞注：駒養二音)・・・燕謂之蛾蚌(郭璞注：蟻養二音)」がある。「蚺蜉」は“大アリ”。現在[i³ ian⁰], [mi³ ian⁰]など、[ian]を含む語形が、山東省(=齊魯)を中心に分布しており、“アリ”を指す(方言地図未作成)。特に[i³ ian⁰]は『方言』の「蛾蚌」=「蟻養」にほぼ対応する。但し燕、つまり現在の河北省には[i³ ian⁰]が分布しないようである。河北省や山西省に多くみられるのは「蚺蜉」であり、この語形については下文で取り上げることになる。

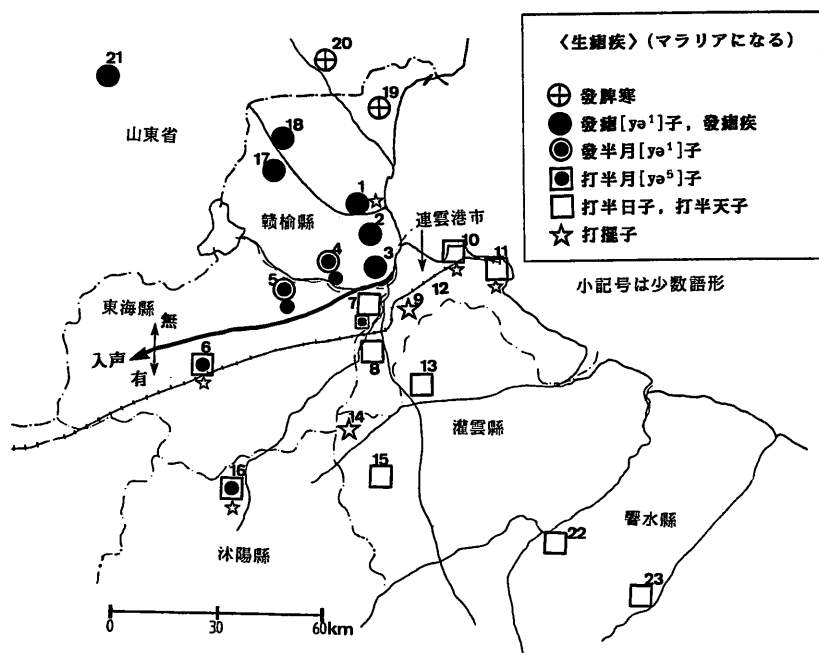
このように文献の記載と方言分布が一致する例はさほど多くはないであろう。むしろ「崽」や[ian]が2,000年間も同じ地域で保存され続けてきた特殊な事情を考察した方がよい。「崽」と「囡」の場合は、“むすこ”だけでなく、一般に“子供”を指す、また一部の方言では接尾辞(北方の「子」に相当する)にも使われる(馮愛珍「福清話名詞性后綴“囡”」中国語文1991-6)、といった頻度の高さに支えられて保存されたのではなかろうか。但し頻度が高ければ消耗度が高く変化を生起し易い、というのも言語変化の一般的傾向であり、事実、廈門方言では“むすこ”を表す形態素[kia]が“こども”や名詞接尾辞を表す形態素[a]とは異なっている。これは機能負担量の増加に伴って「囡」が二形態素に分化したものか。今の所は「崽」「囡」について他の基礎語彙とは異なる条件があったことを指摘するにとするにとどめたい。

4. 不連続的發展をもたらすいくつかの要因

以下、方言変化の連続性を阻害する諸要因を類型化して紹介したい。日本語方言については、徳川宗賢・W. A. グロータース編『方言地理学図集』(秋山書店, 1977)、徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書, 1979)、佐藤亮一監修『方言の読本』(小学館, 1991)などの教科書がある。

[1] 民間語源——マラリアが駆除されてお月様になった話

民間語源(=上記通俗語源)は至るところで日常的に生まれている。豚児曰く、「隣家のおじいちゃんは東京にある[dezuni: rando]を[nezumi: rando]と呼んでいる」と。この新語形の創造者はおそらく“デズニー”が人名であることを知らない。それ故[dezuni:]は彼にとって全くの恣意的な記号にすぎない。そこで彼は第一、第三音節の子音を類似音にすることで、語形を非恣意的な記号(ねずみ=Mickey mouse!)に変えたのである(有縁化)。



地図 3

このように民間語源が働く場合には、その条件として語の恣意性が高くなっている必要がある。地図 3 をご覧いただきたい。この地域では“マラリア”のことを「瘧[ya¹]子」という地域(北部)と「半月[za⁵]子」又は「半天子」という地域(南部)があるが、両勢力の中間地帯(西部)では「半[ya⁵]子」(第二音節の声調は地点によって 1 声、5 声の違いがある)という新語形が生まれている。新語形の第二音節は現在「月」と認識されており、これは恣意的記号「瘧」が南部の語形「半月子」「半天子」に出会った結果(接触)、民間語源が働いて「瘧」が「月」(「瘧」と同音)と捉えられたためである(拙稿「方言境界地域に於ける新語形の発生とその成因」アジアアフリカ言語文化研究 28, 1984 参照)。この場合、形態素[ya^{1/5}]は音声的には全く不変なので、Neogrammarian の立場からすれば、連続性が保たれていることになる。しかし言語地理学は、「瘧子」>「月子」という語の変化が起きたと考える。signifiant(形式)は不変でも signifié(意味、表現内容)に断絶がある⁸⁾

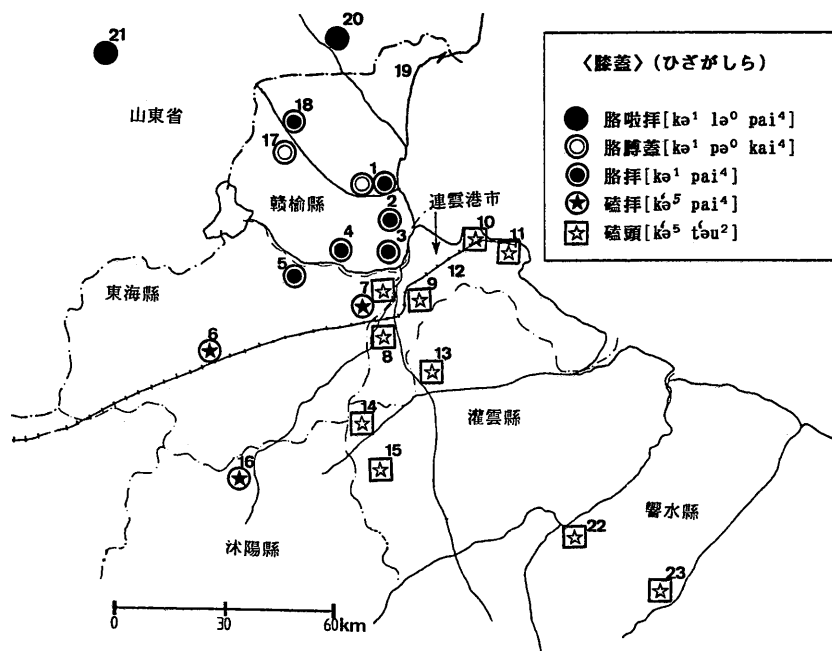
同様の例は『論文集』に豊富であるが、特にその第三章をご覧いただきたい。例えば大同地域には、“コウモリ”を表す語形「夜[ie]蝙蝠」が民間語源によって「月[ye]蝙蝠」又は「院[ye]蝙蝠」になった地点がいくつかある。“夜鳥”が“月夜の晩に飛ぶ鳥”“中庭を飛ぶ鳥”になったのである。尤もこの変化には音声現象が深く関わっている。この地域ではいくつかの語について、介母音の[y]を有する地域と有さない地域([y]が[i]になった地域)が境界線を形成しており、[y]は現在消滅しつつあるのだが、境界地域において過剰修正(hypercorrection)が働いて、語源とはかけ離れた語形「月[ye]蝙蝠」「院[ye]蝙蝠」が生まれたものである。これとは逆に“馬車の梶棒”を表す語形「轅[ye]条子」の第一音節は[ie]と発音されることがある。“過剰修正”の例は江蘇省東北部ではまだ発見していないが、東京方言で“ヒ”を“シ”発音する話者が、“シ”であるべきところを逆に“ヒ”と発音してしまうことはよく知られている。この“コウモリ”の例では、signifiant([ie]>[ye])と signifié(「夜」>「月」「院」)の双方が変化した。

大同地域と江蘇省東北部で起きていることは互いに無関係であるが、いずれも等語線が集中する境界地域である点では共通しており、類似した現象が見られるのが興味深い。

[2] 混交——膝がとれてしまったのに膝まづいて拝む習慣だけは残ったという話

私の方言(岐阜)では“恐ろしい”ことを「オソガイ」といい、“脳味噌が足りない”ことを「ニスイ」(火力などが弱いという時にも使う)という。最近そのうち二語の由来がわかった。いずれも山口幸洋『オサンドサンという名の鳥』(近代文藝社, 1994, p. 89)に拠る。「オソガイ」は「オソロシー」と「コワイ」(>*オソゴワイ)、「ニスイ」は「鈍い」と「安い」の、いずれも混交形、という。言語地理学でいう“混交”(“混淆”)とは、隣接する地域に分布する二語形が接触して混合語形が生じることを指す。

地図4は“ひざがしら”を表す語形の分布図である(「身体語彙の体系と語形変化」アジアアフリカ言語文化研究 30, 1985 参照)。この地図で東南部に分布する語形「磕頭」は「磕膝頭」(地図には出てこない、その南側に分布)から変化したものと考えられる(「言語地図と文献による語彙史の再構」『伊藤漱平教授退官記念中国学論文集』汲古書院, 1986 の全国地図参照)。これは「磕膝頭」から“跪礼”を表す「磕頭」が想起されたもの(跪礼する際には膝頭を地面につけ



地図 4

る)、つまり民間語源による変化である。この変化で重要なのは、本来“ひざがしら”を表した成分「膝」が語形から消えてしまったことである。

さてこの語形は北の語形「胳膊拜」と接触することで、西部地域に混交形「胳膊拜」が生まれた。「磕拜」(地面におつけて拝む)でも“跪礼”の意味を表すだろうから、この例では *signifiant* だけ変化して、*signifié* の方には変化がなかったことになる。一方この変化を北の語形「胳膊拜」[kə¹ pai⁴] から見直すと、第一音節の [kə] (胳膊) が [k'ə] (磕) に置き換えられて、「磕拜」が生まれたことになる。再度強調しておく、これは「声母が無気音から有気音に変化した」という音声変化ではないのである。

「胳膊拜」>「磕拜」の変化では、[kə]>[k'ə] という *signifiant* の変化にとどまらず、*signifié* の方も変化した。「胳膊拜」[kə¹ pai⁴] は地点 20, 21 にみられる [kə¹ lə⁰ pai⁴] から [kəɾ¹ pai⁴] を経て生まれた語形である(前掲拙稿 1986 参照)。漢字表記すると「腕をついて跪礼する」ととれるが、[kə¹ lə⁰ pai⁴] にはおそらく“跪礼”の意識はなかったであろう(無縁語)⁹) それが南の語形「磕頭」と接触

することで「磕拜」が生まれ、同時に“跪礼”の意識が生まれたと考えられる。或いは「磕頭」という語形とともに“跪礼”に対する意識が伝播したと考えてもよい。但しこれは語形形成の当初だけのことで、話者は現在[k'a⁵ pai⁴]の意味を認識していない。

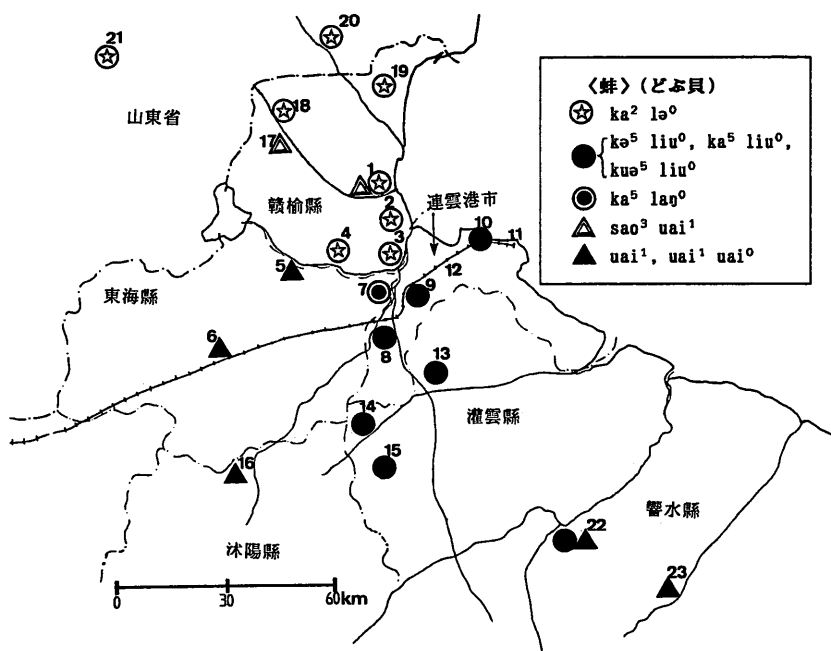
ここで述べた“跪礼”に関わる民間語源は一つの推定であって、下文〔4〕ではこれらの語形に関するもう一つの民間語源説を提案することになる。

〔3〕類音牽引——どぶ貝がトノサマガエルに恋をした話

「果羸轉語記」のように森羅万象が奔放に転じていく訳ではないが、方言の世界では一見全く無関係な動物、植物などの語形が驚くほど類似していることが少なくない。このような類音牽引を生む根本的要因が言語記号の恣意性にあることはいうまでもない。小林好日は次のように述べている：「土筆と蛎螻とが共にツクツクホーシとなったのは単に同音による無意識の牽引である。山鳩を意味するデデッポが蒲公英の名となったり土筆の名となったりしたのは山鳩の鳴く頃に土筆が出たり蒲公英が咲く時節であったりする為ではない」（「同音牽引と同音衝突」、『日本の言語学』6，大修館，pp. 353-4 による）。

江蘇省東北部では“青蛙”（トノサマガエル）を「[uai²]子」と呼ぶ。「花」又は「癩」という修飾成分が付加される地点もあるが、語幹が[uai²]である点では下記地点5，6を除きすべての地点が一致する。地図5は「蚌」（カラス貝，どぶ貝）を表す語形の分布を示したものである。¹⁰西部の地点5，6，16及び南部の地点22，23では[uai¹]又は[uai¹ uai⁰]である。語幹の形式は声調以外“青蛙”と同じで、両者は主に接尾辞の有無、重畳形をとるか否か、といった形態的手段によって区別されている。地点5，6ではさらに語幹の声調も接近しており、「青蛙」の方が[uai²]でなくて、[uai³]になっている。地点5，6では声調1と3の調値が非常に近い（いずれも中窪みの低曲調。声調1は音節中位で喉頭化がみられるのに対して声調3ではみられない）。

『論文集』のデータから一例を追加しておく。最近山西省方言について「舒声促化」という現象が指摘されるようになった。非入声音節が軽声(unstressed)を条件に入声に変化することを謂うが、これはグロータース神父が40年前に宣化方言で発見した現象である（“Linguistic Geography of the Hsüan-hua region” 史語集刊29上，1958）。『論文集』第四章「コウモリ」（蝙蝠）がその例だが、これと関連する“アリ”（蚂蚁）の語形を併せて示す。



地図5

	コウモリ	アリ
宣化(河北)	① iɛ⁴ piɛ³ xuɕer³ ② iɛ⁴ piẽ xuɕer³ ③ iɛ⁴ piĩ xuɕer³ ④ iɛ⁴ piã xuɕer³	ma³ i/ ma³ iɕer
大同(山西)	iɛ⁴ piɛ¹ fər³	ma³ piɛ¹ fər³
朔県(山西)	(iɛ⁴ piɛ¹ fər²)	ma³ piĩ⁵ fər (ma³ piĩ⁵ fər)

“コウモリ”の宣化方言形①に於ける[piɛ³]は声調を除き「蝙」の規則形。それが弱アクセントによつてまず②になるが、[piẽ] (゚は短母音を示す)はこの方言の音韻体系にない音声なのでそれが③④に変化し、「どの押韻辞典にも載っていない入声語」(『論文集』p. 148)が誕生したのである。

私がここで注目するのは、『論文集』(p. 150)が関連して言及している大同と朔県の語形である。朔県の“アリ”については、当時グロータース神父に師事していた橋本萬太郎先生のデータが紹介されているが、“コウモリ”の語形は橋

本「晋語諸方言の比較研究」(アジアアフリカ言語文化研究 14, 1977)にも載っていないので、江蔭昶『朔縣方言志』(山西高校聯合出版社, 1991)によって補った(括弧内の語形)。宣化では“コウモリ”と“アリ”は全く関係しない。大同では両者が類音牽引を起こした結果、語形の第一成分[ie⁴]「夜」と[ma³]「螞」によって区別されるようになった。

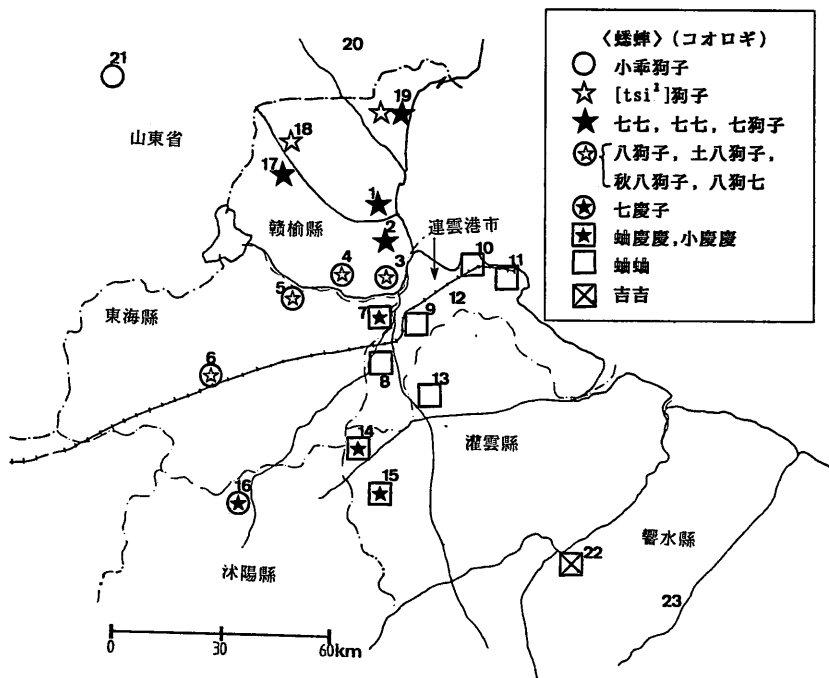
では[pie¹ fər³]の語源は何であったか。“コウモリ”が「蝙蝠」であることは疑いないが、“アリ”は上掲橋本論文がそう記しているように「虻蜉」であろう(上記 p. 54 参照)。朔県は両者が同音牽引を起こす中間段階を示していると思う。“アリ”の[ma piō fər]は第二成分が入声化していることが注目されるが、これはおそらく「螞虻蜉」である。大同方言の[pie¹ fər³]は、「蝙蝠」と「虻蜉」いう別の単語だったものが、類音牽引を起こした結果、朔県方言のような段階を経て同形になった、と考える。

グロータース神父は「虻蜉」が『爾雅』『方言』『禮記』などに出てくる“由緒正しい”語形であることを知った上で、“コウモリ”を「蝙蝠」、「アリ」を「虻蜉」と書いてしまっただけで、両者が「二つの異なった語であり、言語変化の上で二本のかけ離れた線上にあるものだ」と勘違いしてしまう危険性がある」と、批判している(『論文集』p. 151)。私は、語源を示すという意味では、漢字表記も構わないと思う。しかしなぜ「蝙蝠」と「虻蜉」が同形になったかの説明がなければ、それは方言の“権威付け”以上の意味がないばかりか、方言の世界で起きている真実を覆いかくしてしまう点で弊害が多い。『果羸轉語記』が解明すべきはまさしくこのような問題であった。

[4] 同音衝突——ひざがしらと喧嘩して負けた土くれがどぶ貝に泣きついた話(付録: 鳴き声を変えたこおろぎが四十九日の晩に忠犬ハチコウに化けた話)

上記大同方言の“コウモリ”[ie⁴ pie¹ fər³]と“アリ”[ma³ pie¹ fər³]では、[pie¹ fər³]が恣意的な成分となっているが、語形の第一成分は恣意性が低い。江蘇省東北部の“どぶ貝”と“トノサマガエル”では重疊、接尾辞、声調等によって両者の区別が保たれている。このように類音牽引によって接近した二語形は、完全に同形になることはなく、“平和共存”が保たれている。ところがもしこの均衡が破られて“闘い”に発展すると、ジリエロンが挙げた“雄鶏”と“猫”のように、一方が勝利し、一方が敗れ去るのが通例である。

フランス南西部には語中の子音-ll-が-t-に変化する音韻境界線がある。“雄



地図 6

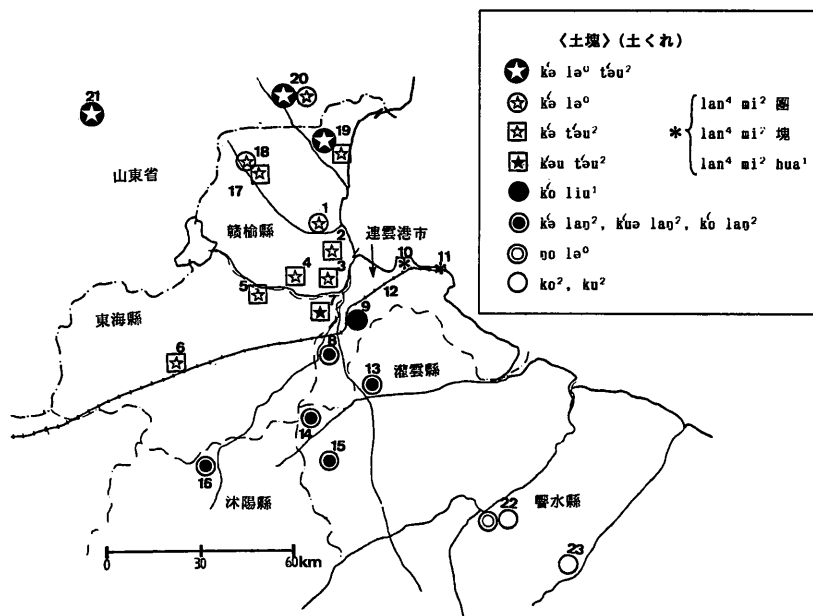
鶏”を表した gallus はこの境界線の西及び南の地域で音韻変化を蒙った結果、“猫”を表す gat(〈cattus〉)と同音になった。「猫」と“雄鶏”の決闘では“猫”が勝ち残り、その結果敗れ去った“雄鶏”の方は、“雛鶏”を表した pullus、“雉”の faisan、さらには“助任司祭”を表した vicaire といった語形に取り替えられてしまった(以上簡略地図はコセリウ著、柴田・グロータース訳『言語地理学入門』1981, pp. 72-4; 詳細地図は J. Gilliéron et M. Roques “Mots en Collision: Le COQ et CHAT”, 日本方言研究会発表論文集 54 参照)。これは“同音衝突”の古典的例であるが、日本語方言については馬瀬良雄『言語地理学研究』(桜楓社, 1992)に実例が豊富である。

地理的分布を考慮しないものなら、“同音衝突”は中国言語学でもよく取り上げられている。“忌諱”という現象がそれで、例えば「傘」[san³]は音声的に「散」[san³]に通じるので、“かさ”をいうのに「遮」「撐花」「撐竿子」といった全く別の語形に取り替える。上掲拙稿(1984)で取り上げた“コオロギ”(蟋蟀)は、

方言地図を使ってタブー語を研究したはじめての例である(地図6)。江蘇省東北部では“コオロギ”がかつて * [k'yə⁵ k'yə⁰] (地図6で「蝻蝻」と表記した語形の祖形)又は * [ts'yə¹ ts'yə⁰] と呼ばれていたが、北部・西部では y>i の変化が生じて(上記[1]で取り上げた大同の“コウモリ”と同じ変化)、[ts'i¹ ts'i⁰]又は[tɕ'ia⁵ tɕ'ia⁰]となった(南部では * [k'yə⁵ k'yə⁰] > [tɕ'yə⁵ tɕ'yə⁰])。ところが北部・西部の語形は、たまたま「七七」、つまり“四十九日”と同音になってしまったため、「七七」>「七七狗」, 「七狗」>「七八狗」>「秋八狗」, 「八狗」という変化が次々と起きた(便宜的に漢字表記した。接尾辞の「子」を取ることが多いが省略)。¹⁾ ジリエロン流に言えば、“コオロギ”が“四十九日”との闘いに敗れて犬の“狆”(「八狗」)になってしまった訳である。一方西南部には[tɕ'ia⁵]が[tɕ'ia⁰]となり、漢字表記すれば「七慶」と呼ぶ地点がある。これは“おめでたい”語に置き換えた例である。

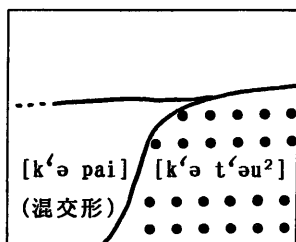
昨年大阪で開催された漢蔵言語学会で発表された李栄氏の論文、“A Tabu Word in Chinese” (in “Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics, 1994”, pp. 421-427)が、方言地図を使ってタブー語[pi¹] (female genitals)の問題を考察している。「筆」という語は、山東省の東部で[pi³]、西部で[pei¹]である。西部の語形は音韻変化の通則では[pi¹]となるから、回避されて[pei¹]となった。これだけなら方言地図を使用する必要もなかろう。おもしろいのは、等語線の境界付近でタブー語と同音の[pi¹]が2地点(濱県、広饒)みつかることである。やはり境界線に近い昌樂と濰坊では「写管」という言い換え語がみつかるから、濱県や広饒ではどうなっているだろうか、というのが李栄氏の疑問である。このような事例が蓄積された上で、他の言語と比較してなおタブーによる同音回避が中国語に多いとなれば、それではじめて“中国語の特殊性の一つ”が証明されたことになるだろう。

タブー語でない同音衝突の例を一つ紹介しておく。地図7は“土塊、土くれ(乾いたもの、湿ったものを問わず、その総称)”を表す語形の分布を示したものである。実際に使われる語形は、これらに“土”(乾いたもの、湿ったものを問わず、その総称)を表す[lan⁴ mi²]又は[mi²] (南部の地点14, 15, 16, 22, 23では[ni²])を前置することも多い。また[lan⁴ mi²]や[mi²]に“かたまり”を示す「塊」や「團」を付けた語形は、それしか使わない地点10, 11を除き、地図には示さない。北部では[k'ə t'əu²]又は[k'ə lə t'əu²]が多い(接尾辞は省略)。これらの語の最終音節は明らかに「頭」。問題は語源不明の第一音節[k'ə]だが、声調が不安定で、高平調、低平調又は上昇調である(調類の同定が困難)。また北

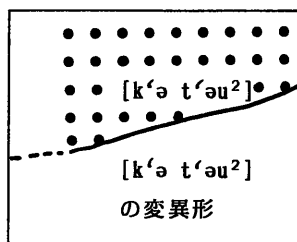


地図7

ひざがしら



土塊



部には入声が存在しないのに、[k'ə]の音節長は短いと感じられることがある。南部の語形の第一音節は、北部の[k'ə]に対応するとみられるが、[k'o], [k'ou], [k'ua], [ɣo]など様々な語形が現れる。声調はすべて高平調だが、音節長は長い地点と短い地点がある。

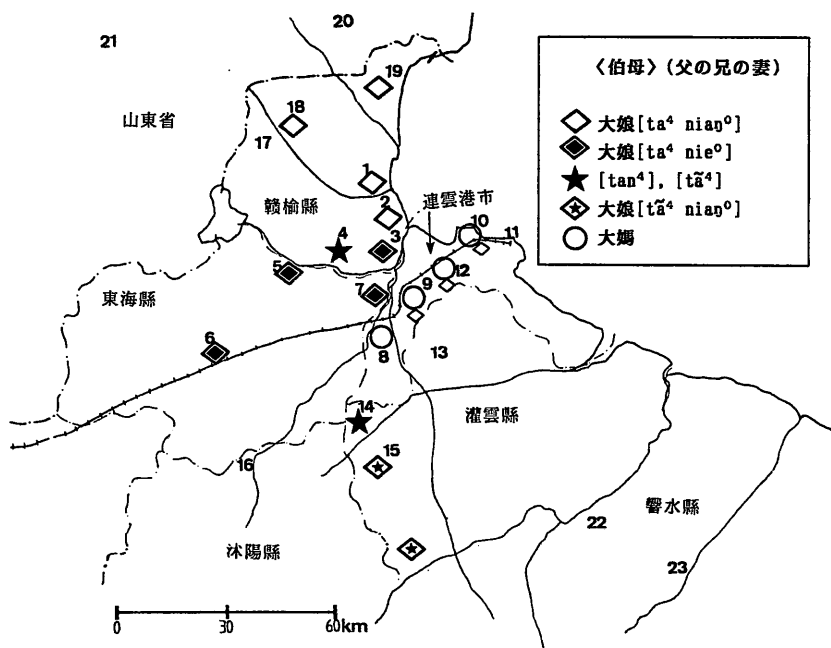
さてこの地図を先の地図4 “ひざがしら”と比較してほしい。“ひざがしら”

を表す語形は南部諸地点で[k'ə t'əu²]である。第一音節の調値は高平調であることが多い(少数は低平調)。一方“土塊”を表す語形は今度は北部で[k'ə t'əu²]がみられる。つまり指示対象を異にする同一又は近似した語形が、地理的に“相補分布”を示しているのである。これは「同音衝突が分布のうえで相補分布をとって回避される」(馬瀬良雄『言語地理学研究』p. 56)という現象の一例ではないだろうか。“土塊”はかつてこの地域全体で[k'ə t'əu²]と呼ばれていた。ところが南部地域では“ひざがしら”を表した[k'ə̌ ɕiə̌ t'əu²] (磕膝頭)が“跪礼”への連想から[k'ə t'əu²] (磕頭)に変化し、“土塊”と同音衝突するに至った。というよりも“ひざがしら”の形状は“土塊”に似るから、“跪礼”は結果であって、民間語源としては“土塊”への連想の方が先に働いたのかもしれない。とすれば、これは民衆が「意図せず」作りだした同音衝突ということになる。“ひざがしら”と“土塊”が[k'ə t'əu²]という一つの significant をめぐって争えば、勝利するのは前者である。なぜなら“ひざがしら”には“跪礼”との association という“後ろ盾”があるから。敗れた“土塊”は語幹の形式を[k'o], [k'əu], [k'uə], [ŋo]などに変えると同時に、いくつかの地点では[t'əu²] (頭)を[lag²], [liu¹]等に取り替えて、自己の保全を図った。但し“ひざがしら”の方が負けた、又はおつきあい形式を替えることがあったと考えてもよい。前記「磕拝」は「脇拝」と「磕頭」の混交形だが、変化の原因の一つとして、「磕頭」が“土塊”を表す同音語、類音語との衝突を回避したことがあったかもしれない。ちなみに地点6, 7, 16では「磕拝」の第一音節は[k'ə̌]でなく、[k'ǎ] (母音は若干中舌化している)又は[k'ǒ]と発音されることがある。

ここで再度地図5 “どぶ貝”をご覧ください。連雲港市を中心に[lag⁰], [liu⁰]を有する形式がみられる。声調は轻声だから、“土塊”の[lag²], [liu¹]と対応するかどうかわからない。しかし“どぶ貝”と“土塊”は“まるっこい”ことで共通するではないか! “ひざがしら”→“土塊”→“どぶ貝”→“トノサマガエル”……。我々はついに「果羸轉語記」の世界に迷い込んでしまったわけである。しかしながらこのような語の転生流転が、民衆の無意識の気まぐれと語形の伝播によるものであることは、もはや明らかであり、“まるっこいもの”に共通性を見だし、その起源を古代中国語に求めることなど、いかにばかげた空想であるかが理解されよう。

[5] 意味の分担——“おじ夫婦”と“またおじ夫婦”が別居した話

同じ意味を表す二つの語形が接触する時、一方が他方を呑み込んで消滅させ



地図 8

るのではなく、意味を分担して共存を図ることがある。九州、沖縄に広く分布する「ナエ」は「地震」を表す古語であったが、新語形「ジシン」が伝播した結果、揺れの大きいものは「ジシン」、小さいものは「ナエ」という、“意味の分担”が図られた(前掲『日本の方言地図』pp. 114-8)。余談に互るが、私の方言ではかつて「リシン」と呼んでいたらしい(私は聞いたことがない)。『日本の方言地図』がそれを「ジシン」の訛語とするのには納得できなかったのだが、山口幸洋氏(前掲書 pp. 77-80)はちゃんと“ユリ+ジシン÷2”と述べておられる。但し「リシン」のように恣意性の高い語が、標準語や大方言のサポートなしに生き残るには、やはり「ナエ」と「ジシン」のように、かつて「ユリ」との併用があった、と考えるべきではないか。「ユリ」は長崎・佐賀に残っている。

地図 8 は“伯母(父の兄の妻)”を表す語幹の分布図である。[tan⁴] (実際の使用では重畳型の[tan⁴ tan⁰]、又は排行数を前置した二[tan⁴]など)というおもしろい語形の成因については、ここでは触れない。ここで注目するのは連雲港市にだけ孤立的に「媽」が分布することである。ところが連雲港でも「娘」が

使われることがあり、それを小記号で示した(地点9, 10, 12)。但しそれは“隣の人がうちの「伯母」を呼ぶ時”又は“父の年上の従兄弟の妻”を呼ぶときに使われる形式である。これは次のように解釈することができる。即ち連雲港では“父の兄の妻”を呼ぶのに「媽」が使われていたが、周辺地域の「娘」が強力でそこに割り込んだために、“意味の分担”が図られて、新語形の「娘」はそれより頻度の低い隣接意味領域に用いられるようになった、と。

似たことが「伯父(父の兄)」にも起きている。地点12(趙巷という小村落)では、“父の兄”は[ɕie²]と呼ばれるが、他地点の通常形[ie²]は“父の年上の従兄弟”を呼ぶのに用いられる。[ɕie²]は地点14でも“父の兄”を呼ぶのに使われるが、“意味の分担”があるかどうかは聞き漏らした。趙巷のような使い分けは恐らくその周辺にもかなりあるのだろう。江蘇省北部は“父の兄”を表す語幹がほとんど[ie²]だから、[ɕie²]は「伯母」の「娘」ように周辺地域から伝播したのではなく、意味分担のために[ie²]から派生した新しい語幹であろう。従ってこの場合は旧語形が隣接意味領域に追いやられたことになる。とすれば“伯母”についても上記とは逆に「娘」が古く、「媽」が新しいと解釈する余地がありそうだが、ここではこれ以上深入りしない。

全く同様のことをグロータース神父が報告している。大同東南部では、“父の兄”を表す語幹が、西部では「爹」、東部では「爺」であり、両者は明確な等語線を形成している。ところが西部でも等語線に近い地点では次のような“意味の分担”がみられる：“父の兄”は「爹」、父の年上の従兄弟は「爺」。グロータース神父の解釈によれば、等語線はかつて今よりもっと西にあったが、西の語形「爹」が東に進んだ結果、旧語形「爺」が「使用頻度の低い意味領域に逃げ込んだ」(『論文集』p. 82)のである。

[6] 隣接意味領域への語形の転用——“父”が“叔父”になったので“叔父”が失踪した話(付録：わが家は万世一系に非らず)

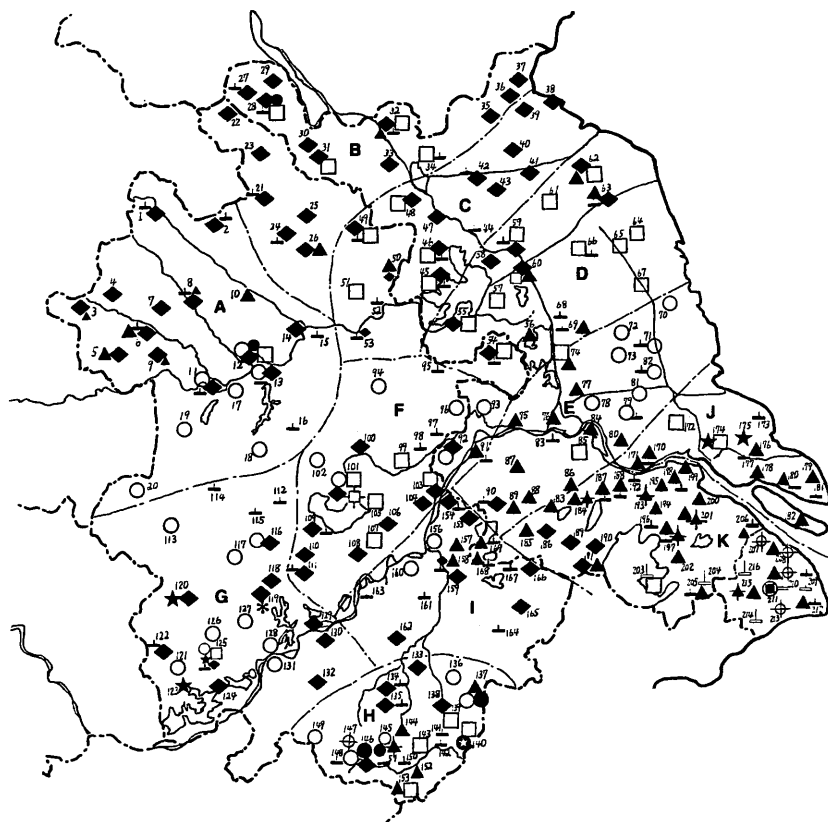
親族称谓は体系をなし、中国語の場合は特に、同輩親族(例えば父と伯父と叔父)の呼称で signifiant と signifié の関係が通時的に様々に移り変わる。私はこの点を“中国語の特殊性の一つ”と考えており、“排行制”(称谓語幹に大、二、三・小などの排行数を前加するシステム)によって称谓語が固有名詞化されたことが、このようなうつろいやすさを生んだ要因の一つ、と述べたことがある(拙稿「江蘇・安徽両省における親族称谓形式の地理的分布と古称谓体系の再構」(尾崎雄二郎・平田昌司編『漢語史の諸問題』, 京都大学人文研, 1988, p. 211)。

“排行制”とは称谓語幹に大、二、三・・小などの排行数を前加するシステムで、発話場面においては、世輩さえわかれば、呼びかけ(又は言及)対象者を排行数だけで特定できる。その場合語幹それ自体による情報伝達量は少ないから、極論すれば、語幹は何でもよいといえる。語幹がしばしば軽声で発音されるのはその反映とみることもできる。従って個々の称谓語だけでなく関連する称谓語をも含めて体系的に変化を捉える必要がある。

中古中国語で“父”を呼ぶ口語語彙(正確には語幹)には三つのものがあった。「爸」(* pa<「父」* bia)、「爹」(* tia, * da)それに「爺」(* jia)である。「爹」には二形式があったが、うち * da(上声)の方は「大」と同音になって、語源意識は失われたとみられる。これらの語形は現在も全国の方言で使われており、“父”を表す語形の分布は非常に複雑である。ところが歴史言語学者はなぜか「爺」だけを特別視する傾向が強い。例えば俞敏氏は山東方言に『木蘭詩』で木蘭がその父親を呼ぶ形式「爺」をみつけたし(「親屬稱謂的擴大和轉移」『中国語文学論文選』, 光生館, 1984, pp. 62)、張惠英氏は『金瓶梅』で、“父”は一般に「爹」であるのに、「爺」が用いられる箇所があることを指摘し、これは吳方言の反映だという(『金瓶梅俚俗難詞解』, 社会科学文献出版社, 1993, p. 223)。後者についていえば、吳方言(正確には北部吳語)で「爺」が使われるのは、間接呼称の場合が多く、直接呼称の場合は「爹」が多い、というのが事実である。¹²⁾ “父”を「爺」と呼ぶ地域で最も有力なのは、吳方言よりもむしろ贛・客家方言である。いずれにせよこれらの論者に共通する誤りは、①語形の地理的分布に対する観察を欠いたまま、②個別方言を直接文献に結び付けようとする、ことである。方言で“父”を表す「爺」が『木蘭詩』や『金瓶梅』のその、直接の子孫であるかもしれないし、ないかもしれないことを証明する例を地図9、10に挙げる。

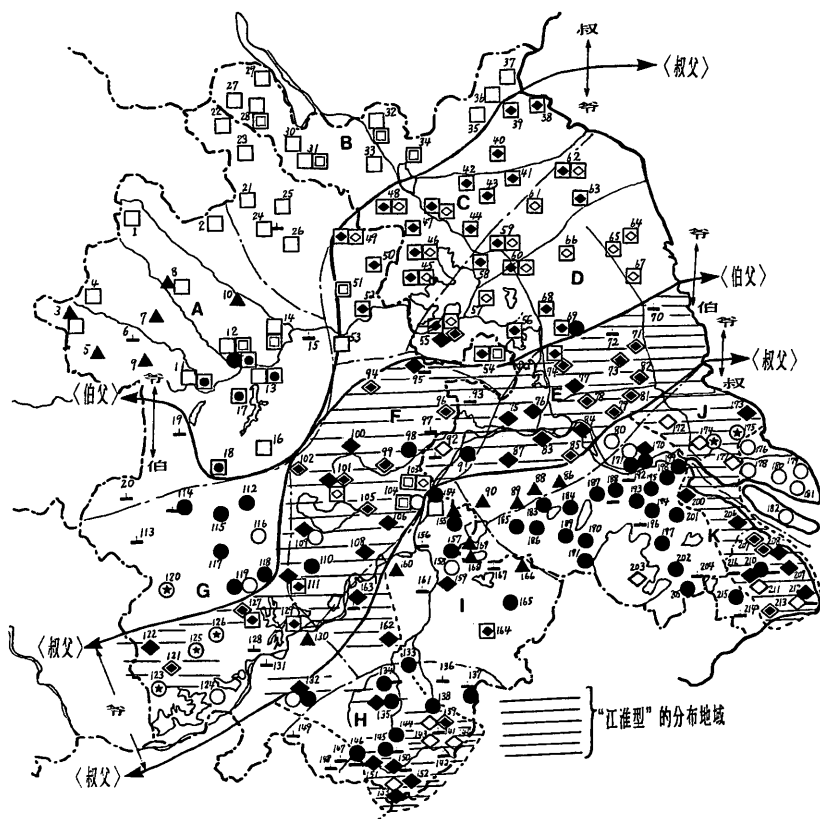
地図9は“父”を表す語幹の分布を示した広域地図である。江蘇省の塩城地区(地図のD地区)には「爺」がまとまって分布することがわかる(四角記号)。ところがその北側には主に[ta¹] (地図では“大”と表記)が分布し、これはおそらく「爹」(* [tia¹])が変化したものである。また南側には「伯」([pe¹])と「爹」([tia¹])が分布するが、うち「伯」はもと「伯父」を表した語形が“父”に転用されたもので、それ以前は“父”が「爹」又は「爺」と呼ばれていたと推定される。こうしてみると、「爺」の周辺はほとんどが「爹」であったことになるから、周囲分布の原則によって、塩城地域の「爺」は「爹」より新しいと結論される。そうするとすぐに、「この地域以外にも「爺」は分布しているではないか

〈父〉			
“爷”	1 類 □ “爷” (“大爷”)	“叔”	5 類 ● “叔”
	1' 類 ⊕ “阿爷”		5' 類 ⊙ “爷叔”
“爹”	2 類 ▲ “爹” (“大爹”)	“爸”	6 類 — “爸” (“m 爸”)
	2' 類 ⊥ “阿爹”		6' 類 ⊥ “阿爸”
“大”	3 類 ◆ “大” (“温” “磨”)	“父”	7 類 ★ “父”
“伯”	4 類 ○ “伯” (“大伯”)	其他	☆ “叫名字” “星”
	4' 類 ⊕ “阿伯”		



地图 9

親屬稱謂體系〈伯父—父—叔父〉													
I 北 方 型	I-0	□	徐州型	II 江 淮 型	II-0	◇	南通I型	III 南 方 型	III-0	●	蘇州型		
	I-1	}	□		新沂型	II-E-0			集團型	III-E-0		望江型	
	I-2					II-K-0				III-E-1			
	I-3					連雲港型				II-E-1			III-E-2
	I-4					鹽城型				II-E-2			III-E-3
III-0	海鹽型	II-E-3	銅陵型	III-E-3	啓東型								
IV	IV-0	⊗	南通II型		II-E-0	◆	揚州型		III-E-3	阜陽型			
					II-E-0				III-E-3	句容型			
					II-E-0				III-E-3				
					II-E-0				III-E-3				
					II-E-0				III-E-3				



地圖10

(例えば、先ほどの贛・客家方言)」という質問がでる。また塩城地域で“父”を表す「爺」が新しい形式だとしても、ではそれはどこから来たのか、という問題を解かねばならない。

そこで地図 10 である。これは“伯父—父—叔父”という三つの親族を表す語幹を体系として図示したものである。今問題になっているのは、“塩城型”の「爺—爺—爺」(左から伯父、父、叔父の語幹を示す。以下同じ)。断っておくと、ここで三つの親族範疇を同じ「爺」で表記するのは、共時的には正確でないこともある。例えば地点 D-57 では“父”が[ia²]、“伯父”が[ie¹]、“叔父”が[ie²]である。これは前項で地点 12(趙巷)の“叔父”について指摘したように、同一語幹「爺」に発する形態素が意味分担のために形式を変えた例である。従ってこの場合同じく「爺」と表記するのは通時的解釈を加えた結果、ということになる。このような形式の分化は“塩城型”に限らず、他の類型にもみられる!¹⁹

結論から先に述べる。この体系はそのすぐ南に分布する“銅陵型”の「伯—爹—爺」から変化したものである。“銅陵型”はかつて連雲港あたりまで分布していた、と仮定してみよう。この地域は“北方型”(特に“徐州型”)の影響を不断に受けており、また内的にも“叔父”と“伯父”を同一語幹で称呼しようとする傾向が強まったため、まず“連雲港型”の「爺—爹(>ta¹)—爺」が生まれた。次に父系尊属親を同一語幹で称呼しようとする傾向が強まって、“塩城型”の「爺—爺—爺」が生まれた。父系尊属親を同一語幹で称呼するのは珍しいことではなく、「伯父—父—叔父」(さらに祖父)のように上古中国語以来の遺制である。このことを図示すると次のようになる：

内的変化の方向

↓
 “銅陵型” 「伯—爹—爺」
 “連雲港型” 「爺—爹(>ta¹)—爺」
 “塩城型” 「爺—爺—爺」

外的影響

← “徐州型” 「爺—ta¹—叔」

“銅陵型”をさらに遡ると次の二つの体系に行き着く。

“南通 I 型” 「伯—爺—叔」(分布地域：J, I 地区の一部)

“蘇州型” 「伯—爹—叔」(分布地域：K, H 地区など)

この二体系は要するに、“父”を「爺」「爹」のいずれで呼ぶかの違いである。“銅陵型”は、“父”を「爺」と呼ぶ体系(これはさらに贛・客家方言で優勢)が“父”を「爹」と呼ぶ体系と接触してできた“混交型”であった。まず“南通

I型”で“父”を表した「爺」は、“蘇州型”と接触した際(又はそれ以前に)“叔父”の位置に転用された(又は“転位”した)。⁴⁾すると“叔父”を表した「叔」は、逃げ場を失って姿を消してしまった。地図 10 には“叔父”に関する 2 本の等語線を示しているが、この等語線に挟まれた地域では、現在“叔父”が「爺」と呼ばれている(拙稿『中国江蘇・安徽・上海兩省一市境内親屬稱謂詞の地理分布』好文出版, 1989, 第 3 圖参照)。これは、“爺”の“父”から“叔父”への転用(転位)が起きたこと、及び“銅陵型”がかつて連雲港あたりまで分布していたことをよく物語る証人である(詳細後述)。

もし以上の推定が正しいとすれば、“父”稱謂は最も古い体系(“南通 I 型”)に於いて「爺」であったものが、一度「爹」(“銅陵型”、“連雲港型”)を経て、再度「爺」に戻ったことになる。塩城地区で“父”を表す「爺」は、『木蘭詩』や『金瓶梅』の「爺」に直接つながるものではなく、直接には“伯父”“叔父”を表した「爺」に由来する。

これとは逆の可能性を探ってみても無駄にはなるまい。まず最も古い体系が“南通 I 型”の「伯—爺—叔」だったとしよう。次に“塩城型”で“伯父”や“叔父”を示す「爺」は“父”を示した「爺」が転用されたもの、と考える。その後“塩城型”は“父”を[ta]と呼ぶ“徐州型”の影響を受けて“連雲港型”の「爺—ta¹—爺」に変化した。また西から“銅陵型”が侵入して“南通 I 型”と“塩城型”の領域が分断された。こう考えれば、“塩城型”で“父”を示す「爺」は『木蘭詩』や『金瓶梅』の「爺」に直接つながることになる。この説は“南通 I 型”と“蘇州型”の接触などという仮説を立てる必要がない点が長所である。また北の B 地区には“新沂型”「爺—爺—叔」という援軍もある(これは俞敏氏が山東方言でみつけた体系につながる)。しかし問題は、何故“父”を示した「爺」が“伯父”や“叔父”にも転用されたか、という点である。このような転用が“なかった”ことを証明するのは難しい。上でも述べたように、上古中国語では“父”と“伯父”“叔父”が同一語幹「父」で称呼されていた。しかし“転用”は盲目的に生起するのではなく、その方向には一定の規則性があり、それは地域性を明瞭に反映するのである。この点については次節で述べる。少なくとも江蘇・安徽省に関する限り、“父”を表した語幹が“伯父”“叔父”に転用されたことを証明する内的証拠は存在しない。

5. 余論（1）——言語外的要因

グロータース言語地理学の真骨頂は、方言を文化的諸現象の一部と捉え、言語研究を民俗学、歴史学研究と結合させる点である。これはもはや私の手には余る仕事だが、一つの例を紹介しておこう。

地図 10 に示した地域で“父”を表した「爺」が“叔父”に転用されたのは、“改称”という一種の民俗的習慣による。“改称”というのは、「星命の思想から子供が自分の子としては養い難いという場合に、親属称呼の上で真実の親子関係を表さずにわざと疎遠にすることによって、子の生命を邪鬼悪霊から保全しようとする迷信である」（郭明昆『中国の家族制及び言語の研究』早稲田大学出版、1962, pp. 116-7）。この習慣は中国全土にみられるものだが、この場合それが“叔父”に適用された訳は、前掲拙稿 1988 (p. 233) で述べた。この習慣は一般に臨時的、parole 的なものだが、それが固定的、langue 的なものに転化することがある。

現在“叔父”が「爺」と呼ばれる地域は、ちょうど現代中国の区画研究のいう“江淮官話”の地域に相当し、相当の言語的一致が見られることが明らかになっている。例えば、“祖父”を「爹」と呼ぶのは、江淮方言を南（「公」）及び北（「爺」）の方言と分かつ重要な特徴の一つである。ここでは『論文集』のもう一つ重要な指摘を挙げておく必要がある：これほどの言語的一致をもたらしたのは言語外的諸要因によるのである。

“叔父”の parole 的な“改称”がみられるのは、現在では主に A 地域で、江淮地域とは少しずれるが、これはこの習慣が周辺に伝播し、江淮地域本陣では却って忘却されて、“叔父”を「爺」と呼ぶ langue のみが残ったのである。「爺」の“父”から“叔父”への転用は“江淮官話”を特色づける一つの特徴であり、先に「転用の方向には一定の規則性があり、それは地域性を明瞭に反映する」と述べたのは、このことを指すのである。

『論文集』第Ⅱ章は山西省北東部にみられる等語線の東（弘州線）の成因について、歴史（政治）、交通、民俗、地形等の言語外的要因をフィールドワークと文献調査によって一つ一つ詳しく考証している。とりわけフィールドワークに基づく言語外的諸要因の考察は、現代中国の方言研究には欠けたアプローチである。“叔父”を「爺」と呼ぶ地域がちょうど“江淮官話”地域と重なり、それが“改称”という言語外的要因に基づくことが明らかになったのは大きな収穫

であった。江淮地域には言語的のみならず、文化的にも相当の unity が存在した、と推定されるからである。今後、区画研究が明らかにした言語勢力圏の成因について、言語外的要因が明らかにされる必要があろう。この種の研究はすでに着手されているが、依然として文献に頼った研究が多いのが実情である。

“塩城型”「爺—爺—爺」の成立について、“南通Ⅰ型”「伯—爺—叔」からの直接変化ではなく、一度“銅陵型”「伯—爹—爺」を経ていた、と想定する一つの理由は、江淮地域の言語的・文化的 unity を重視するためである。地図 10 では称谓体系を大きく三分している。“北方型”は“伯父”を「爺」と呼ぶ体系、“江淮型”は“伯父”を「伯」、「父」又は“叔父”を「爺」と呼ぶ体系、“南方型”は“伯父”を「伯」、「父」又は“叔父”を「爹」と呼び、「爺」とは呼ばない体系である。今、“塩城型”及び“連雲港型”では“伯父”を「爺」と呼ぶので、共時的には“北方型”に属することになるが、これは北方方言の影響で変質した“江淮型”の一種で、“江淮型”はかつて〈叔父〉の北の等語線まで分布していた、と推定する。つまり地図 10 で入れた横線は——通時的には——もっと北まで引かれるべきである。さもなくば江淮地域内部にかなり深い溝があったことになってしまう。一方、“塩城型”“銅陵型”の祖型にあたる“南通Ⅰ型”は、J、I 地区など江淮地区に隣接して分布するが、“父”から“叔父”への「爺」の転用を経ていない点で、“銅陵型”などとの間に、通時的にやや深い溝がある。

6. 余論（2）——再び漢語方言の複層性について

上記のように、江淮地域では“父”を「爺」と呼ぶ体系（江淮型）と「爹」（南方型）と呼ぶ体系が衝突した結果、混交型（銅陵型）が誕生した、と考えられる。この場合、地理的分布が、例えば、北に「爺」系、南に「爹」系、中間の江淮地域に混交型というならば、話は簡単だが、全国的分布はもっと複雑である。「爺」系は南にも分布するし（前述の贛・客家方言など）、「爹」系は北にも分布する。実はこの他に“父”を「父」と呼ぶ体系も存在する。地図 10 で“南通Ⅱ型”と呼んだ体系がそれで、G 地区と J 地区に全部で 6 地点認められた。この三種類の体系のうち文献的にみて最も古いのは、第 2 節で取り上げた“祖父”と同様、「父」（* bia > 「爸」）を有するものである。但し方言にみられる「父」が上古中国語のそれに直接遡るかどうかは断言できない。一方「爺」（* jia）と「爹」（* tia, * da）は同源語であった可能性がある。今の所それを証明することはできないが、いずれにせよ、中国語の“父”称谓には歴史的に「父」系と

「爺」「爹」系の語幹があったことがわかる。両系統のいずれが古いかはわからない。文献(規範言語)でたまたま「父」が現れ、「爺」「爹」が現れなかっただけなのかもしれない。その後、後者の系統は「爺」系と「爹」系に分裂した。「父」(「爸」)系、「爺」系、「爹」系、三者の分布は全国的に非常に錯綜しており、単純化はとてもできない。「重層構造」をなしている、というのが適当であろう。

同様の例として“マラリア”がある。¹⁵⁾全国規模の方言地図をみると、“マラリア”を表す名詞には、古くから「瘧」系(「瘧疾」「瘧子」など)と「寒」系(「脾寒」「寒」など)があったと推定される。¹⁶⁾前者は恣意性が高く(無縁語)、後者は元来マラリアで悪寒が来ることを表現したもので、恣意性が低い(有縁語)。両者はちょうど地図9、10に示した地域(江淮地域)で衝突したと考えられる。又は無縁語と有縁語が同一言語(方言)に共存することは十分有り得るから、二系統の語が層をなしていたかもしれない。ところが江淮地域では、さらにおそらく新語形であろう「擺」(「擺子」)が、「瘧」や「寒」と重なるように分布している。「擺」は“悪寒が来て振り子のようにゆれること”で、元来有縁語(但し現在はそのことが意識されていない)。従ってここでも“重層構造”がみられる、といえよう。

また“太陽”では全国的に「日頭」(>「熱頭」)と「太陽」が錯綜分布をしている。うちより古いのは「日」(「日頭」は比較的新しい)だが、「太陽」もすでに漢代の文献にみられるという(潘允中『漢語詞彙史概要』1989, p. 45)。ちなみに「熱頭」は南方のみならず、北方の甘肅省などにも分布している。但しこの場合は、分布の濃淡が認められ、江蘇省とその周辺では「太陽」が多く、「日頭」が少ないのに対して、長江以南では逆に「日頭」「熱頭」が多く、「太陽」が少ない(山東省以北及び西南地方では完全に錯綜)。

以上錯綜分布の例から窺われることは、①中国語には(カールグレンが指摘したように)古代から方言的差異が存在し、それらの方言がある地域で接触或いは衝突した結果、方言層を形成したこと、②相対的に新しい語形がある地域で発生し、旧語形に重なるように全国(広い地域)に伝播して新しい言語層を形成したこと、である。漢語方言の重層性は従来も指摘されてきたことだが、このように一語一語の地理的分布を分析することは行われてこなかったし、“言語接触”といえはすぐに“漢語と非漢語の接触”が問題にされる、という悪癖が蔓延している。上記のようなデータを蓄積していけば、(Wellentheorie でいう)言語的放射の中心地はどこであったのか、さらに“重層構造”がなぜ、どのよう

に形成されたのか、といった問題まで解明できるかもしれない。いうまでもなく、この問題の解明には言語外的諸要因の研究が不可欠である。

7. まとめ

小論では「漢語方言史の連続性」を破壊するいくつかの要因を、私がこれまで観察した方言データを例にとって解説し、併せ関連する問題に言及した。第4節などで挙げた諸現象は、中国各地のあらゆる方言に生起し、また生起しつつある筈である。今必要なことは、このような事例を発見、採集し、類型化することである(これは五十年前のグロートス神父の言葉の繰り返し)。

『論文集』は「ロマンス語やゲルマン語の方言調査で得られたような革命的な発見[民間語源による新語の誕生、同音語の衝突による単語の消失等]が、今日に至るまで中国で生まれてこなかった原因は、多分漢字を読ませる調査方法のためだろう」(p. 150)と述べている。従来“革命的な発見”が生まれてこなかったのは、中国語がヨーロッパや日本の言語とは異なる特殊性を有しているためでなく、普遍的な方法で普遍的な現象を発見する努力がなされてこなかったからである。それを抜きにして「中国語の特殊性が過度に強調される」(『論文集』p. 35)ことが依然として多いように思われる。しかもそれが常に新たな装いをこらして出てくるから事態は深刻である。平山久雄「中国語における避諱改詞と避諱改音」(未名10, 1992, p. 20)は次のように述べている:「先輩の学者には好んで中国語の特殊性を強調する人がある。中国語の語形には顕著な特殊性がある、・中略・、思考の過程がそのまま語序に反映する、・中略・、等々。これらの点で中国語は世界的に珍しい特性を持つ言語だと言われる。我々から見ると、これらは一見そのようにも見られる部分的事象を種にして、安易な一般化を通じ、素人には面白い神話を作り出したものと思われる。神様の特殊性を強調するほど、神主は偉くみえる道理でもある。既成観念不信の戦後に育った私などの関心はこれと異なり、中国語の特殊性と言われることがらもまた一般言語学的法則に基づくもので、中国語にみられる諸現象は人類共通の言語能力の一つの発現形態ではないか。この意味で中国語は他の諸言語となら異なるところがないと予想している」。対象は“先輩の学者”や日本の中国語学者に限らぬ、と思う。

注)

- 1) カールグレンの業績と足跡については、遠藤光暁「現代中国語学の創始者——カールグレンの生涯と学問」(『中国語』1994年8,9,10月号)参照。
- 2) ジリエロンの論文は最近の『日本方言研究会発表原稿集』(47号-, 1988-)に翻訳・紹介されている(大川泰子、W. A. グロータース、佐々木英樹共訳)。
- 3) 「地区連続の原則」「側面地区の原則」などを提唱し(A. Dauzat(ドーザ)著、松原秀治・横山紀伊子訳『フランス言語地理学』大学書林、1958, pp. 44-48)、柳田国男の周圍論に直接的な影響を与えたのはジリエロンの後を継いだフランス・イタリアの学者であった(『日本の言語地理学のために』pp. 235-6, 岩波文庫『蝸牛考』, 1980, 柴田武「解説」pp. 225-6 参照)。
- 4) 原文は「凡上所記、以形求之、蓋有物焉而不方、以意逆之、則變動而不居、抑或恒居其所也」。殷孟倫「《果羸轉語記》疏証叙説」(『子雲鄉人類稿』所収)に従って“まるっこいもの”と要約した。
- 5) 地点番号は、1980年の現地調査で得た地点を1-10とし、1987年の南京大学での調査(14, 15, 17, 18, 19, 20, 21)及び通信調査(11, 13, 16)で得た地点については、南から順に番号をふった。地点12は1983年東京での調査に拠る。
- 6) 実際には *dʒ, *ɕ, *ʒ という来源の異なる声母が一律に北は摩擦音、南は破擦音になる点にも変化の“不連続性”が表われている。なお接尾辞化を起こす形態素には、中古音の正齒音を声母とするものが多い。但し「蛭蚤」[kə tsao] > 「蛭子」[kə tsə]のような例もある(「蚤」の声母は齒頭音)。
- 7) 「日頭」が使われていた地域に「熱頭」が伝播したとき、「日、熱也」という語源意識が浮かぶことはある。
- 8) 括弧に注記したように、本稿では“signifié”を“意味、表現内容”の意で用いる。
- 9) 拙稿(1985)p. 168では[kə¹ pai⁴]を有縁語(腕をついて跪礼する)と解釈したが、訂正する。
- 10) 地図5は実は心許ない点がある。それは指示対象が地点・話者によって異なる可能性があることである。調査では標準語を使って“河にいたる「蚌」をなんというか”とたずねたが、調査後、地点1の話者が手紙で答えてくれた所では、[ka² la]は淡水、海水を問わず、小さな貝の総称として用いられているようであり(標準語の「蛤蜊」ge² li)、特に“どぶ貝”を指す時は[sao³ uai¹]を使うという。地点17はまさにその通りである。地点5, 6では“淡水のもの”と限定して答えているので問題はない。地点16, 22, 23のデータはこの点が不確か。しかし地点23のさらに南に位置する濱海県・八巨郷ではどぶ貝のうち小さいものを[uai¹ uai⁰]と呼ぶ、との報告が得られた。しからばこの地域全体で“どぶ貝”と“ト

ノサマガエル」の同音牽引が起きている可能性がある。なお“しじみ”はこの地域全体が「蜆子」である。いずれにせよ折角おもしろい現象に出会ったのに、資料が不確かなのは残念なことである。ちなみにグロータース神父と王輔世先生の宣化方言調査では、小動物の実物を標本にして調査が行われている。

- 11) 中国語では数字「七」から「八」が連想され易い。「七嘴八舌」「乱七八糟」などの四字格をみればそのことが理解されよう。
- 12) “直接呼称”とは話者がその場にいる親族に直接呼びかける呼称、“間接呼称”とはその場にいない親族に言及する呼称。実際には話者、聞き手、被言及者の三者がその場にいるケースも想定されるが、調査はそこまでゆきとどいていない(木村英樹「第三人称代詞敬語制約現象的考察」中国語文 1990-5 参照)。
- 13) ここで述べた親族称谓形式の“分化”を中国の学者は“變讀”と呼んでいる。この現象は米青(侯精一)氏が「親屬稱謂詞的變讀」(中国語文 1984-5)で山西方言について指摘して以来、“晋語の特殊性”であるかのようにいわれてきたが、漢語方言に“普遍的”な現象であることは、私の調査からも明らかである。汪維輝「《親屬稱謂詞變讀》再補」(中国語文 1991-6)は正しく「この現象は一方言区だけが有するものではなく、調査の進展につれ、各地で同様の例がみつかるだろう」と述べている。
- 14) “転用”“転移”とはいずれも、親族(範疇)Aを示していた語幹aが別の親族(範疇)Bを示すようになることを言うが、特に区別する場合は、aがA、B双方を示すようになる場合を“転用”、aがBにしか示さず、Aには別の語幹が用いられる場合を“転移”と呼ぶ。
- 15) “マラリア”及び次の“太陽”の全国地図は、日本中国語学会第42回全国大会(1992, 姫路獨協大学)における発表「方言地図の語るもの——“マラリア”の方言地図を例に——」で紹介した。
- 16) このことは文献からも窺われる。例えば、『周礼』天官・疾医にみられる「瘧寒疾」は「瘧」と「寒」の混交形の如くである。